

## 野ネズミ調査の思い出

大 串 龍 一

長崎県農事試験場果樹部から金沢大学に転任してきたとき、私はこれまでに扱ったことが無かった新しい研究テーマを取り上げようと考えた。10年余りミカンとビワの病害虫防除に専心してきた私は、理学部生物学科という農業から離れた立場で、害虫あるいは虫害というものを生態的に見てみようと思った。その一つはミカン害虫研究の経験を生かした、琉球の柑橘とその害虫を対象とした農業における虫害の成立の問題であり、もう一つは農作物や林木あるいは貯蔵食品を害するが、昆虫とはかなり違った加害生態を持っているネズミやウサギのような中・小型哺乳動物の問題であった。

琉球諸島の柑橘害虫の生態は、私が知っていた九州の柑橘害虫とはかなり違ったものだった。本上の柑橘の主体となっている温州ミカンがほとんど入っていない奄美、沖縄、八重山の島々の柑橘類とそれに付く昆虫は、近代農業が成立する前の農業と害虫の姿を教えてくれた。4年ほど継続したこの調査は、新たに熱帯生態研究の仕事が始まったために中断したが、今でも私の記憶に深く残っている。

一方、哺乳類とくに野ネズミ類の研究は、金沢市の北郊にある河北潟干拓地の広い草原を主なフィールドとして、20年間にわたって続けた。自然の草原が農耕地や牧野に変わっていく過程で、野生の野ネズミ類がどのようにして農業の有害動物になってゆくのかを知りたいと考えて始めたこの研究は、私に新しい視野を広げてくれた。私がこの北陸病害虫研究会で報告したテーマのほとんどは、河北潟干拓地の調査の中間報告である。

私が調査を始めた1976年頃は、この1350haの広大な干拓地には、まだ所々に塩分を含んだ水の溜まった湿地が残り、塩性植物を交えた低い草が茂っていた。これが乾いてゆくとともに人の背よりも高いヨシ原になり、一部の場所にはヤナギなどの灌木林が出来た。はじめハツカネズミとハタネズミを主としたネズミ類の住む草地に、突然、ドブネズミの大発生が起こり、天敵であるタカの種類であるチュウヒや、イタチの増加とともに終息していった。

1980年を過ぎると大規模な農地造成工事が始まり、広いヨシ原は一面にブルドーザで掘り返されて、ムギ畑や牧草地となっていった。この工事の2年間は非常に減少していたネズミ類が耕地が安定するとともにまた増え始め、とくにハタネズミとジネズミの比率が高くなってきた。干拓地の中にリンゴなどの果樹園が出来ると、樹林地を住み場とするアカネズミが見られるようになった。干陸後数年のまだ塩性湿地の多かった時期に住み着いていた4種の小型哺乳類は、果樹などとともに入ってきたアカネズミを加えて5種となった。私が研究の始めに予想したような種類の入れ替わりは見られず、同じ種類相の中での比率が変わりながら次第に農耕地の動物相になった。現在は主に植物の軟らかい部分を食うハタネズミと、主にミミズや虫を食うジネズミが、ここの哺乳動物相の主体となったようである。

いま、河北潟干拓地では蓮根に対するカモの害とともに、野菜や果樹に対する野ネズミの害が大きな問題となっている。こうして自然草原から完全に農耕地となった干拓地における農業害獣としてのネズミ類の新しい問題が始まっている。